

1931年1月28日 水曜日の夜〔妹宛の手紙〕

プリンストンにて

やさしいコン

あなたからのお手紙、とても嬉しかったわ。あなた、エッセイの賞をもらったの？ どうして教えてくれなかったの？ 今夜はとても気分が高揚しているの。どうしてだかわからないけれど、この2日間、春のようだったのと、書きものをしていたからかしら……。それに、あなたからのあのお手紙もね。

あのねえ、誰かがセザール・フランクの「前奏曲、コラールとフーガ」をピアノで弾いていたので、この間の夜、一人でコンサートに行ったの。^{*36}今のところは、この曲に魅せられているけれど、6ヶ月もすると冷めると思うわ。初めて聞いた時は好きじゃなかったの。その後で、あるフレーズがいくつか出てくると、そのテーマの繰り返しとパターン^{の力強さを}、じわーっと感じるのよ。おまけに、最後に両方のテーマと一緒に演奏されていることに、ある日気付いたときの感激したらなかったわ。（『失われた時を求めて』の中で）スワンが、「ヴァントゥイユからの小楽節」を聞く時の場面を憶えてる？ それとも、そこまでは読んでなかったかしら？ 「スワンの恋」の章に書いてあるわよ。^{*37}

さて、私はコンサートに行きました、そして、ゾクゾクするほど孤独で、爽快でした。早く行ったので、私は腰掛けてそのあらゆるものを吸収したわ、何から何まで——ざわめきも、衣ずれの音も、^{ささや}囁きも、演奏家が登場する前の一瞬の輝きも。それから、私は一人で来ていない人達を眺めて、彼等に哀れみをいただきました。だって、それぞれに他の誰かと、自分の印象を分かち合わなければならないんですもの。それでは、まるで印象がなかったかのように、ただ無駄になってしまうし、一人一人が必ず何かを付け加えなければならないことになり、自分の隣の人の

^{*36} セザール・オーギュスト・フランクは、フランスの作曲家（1822～90）。ピアノ曲「前奏曲、コラールとフーガ」は1884年に作曲された。

^{*37} マルセル・ブルースト作『失われた時を求めて』の登場人物、シャルル・スワンの恋の物語に、恋人オデットとの出会いから、

印象を、自分の印象に重ね合わせなければならないのですもの。どちらの人も、果実をまるごと得られなかったということよ。

その上にまた、私が感じたのは、例えば、親密な二人（夫婦）が、本当に自由に、客観的にその夕べにひたるには、自分達の日々の生活にあまりにも束縛されているということ。彼女の方は、その夕べから細い糸によって引き離され（毎日の努めに引き戻され）——そうね、彼の首の後ろから始まって、「まったく、ジョンときたら、散髪させなくちゃ」とかいうことになるのよ。彼女の腕につけた香水の香りで、彼の方が、「いつだって、新しい香水を買うんだからな。それに、全部バカ高いのに」とか考えるの。

もう一人いるというのは、即座にその二人を一緒に閉じ込めて輪の外^{の熱烈な世界から隔離するもの}だと思わない？ ところで、私はそこに腰掛けてゾクゾクしながら、

「私が一緒にいて欲しいと思う人は、誰も、誰一人いないわ」

と思ったの。だけど、それから考えたのは——違うわ、あなたには一緒にいて欲しいわ。それに、あなたに私の印象を話しても、薄れることは絶対にないし、あなたに私の印象を話すということは、私の考えていることを（聴衆は独創的であるという仮説）むしろ明快にするから……。私の印象をさらに強くするし、それにあなたの印象を聞くのは、私の印象を豊かにこそすれ、逆はなく、さらにそれを超えるものになるだけだ——と確信したの。でも、あなたがまったく同じように思うかどうか（私達二人共、一緒に孤独になろうと考えたの）は、自信がなかったので、ジン^{*38}に頼んで、あなたをさっとあの会場に運んで来てもらうのを止めたのよ。

うちの子、ものすごくかわいいのよ。私がニューヨークから遅く、6時過ぎに戻る時、あの子がまだ起きているかどうかを確かめるために、

いくつかの場面ごとにヴァントゥイユ作曲の小楽節が流れ、この曲を聞いた時のスワンの印象が語られている。

^{*38} イスラム神話の精霊。人や動物の姿で現れ、人間に対し超自然的力を持っている。

道路の向こうの角にあの子の部屋の窓の灯りを探すのよ。そこが暗いと、もう寝かされたから、10時まではあの目をしほするような笑顔をしてもらえないとわかったと、悲しくて胸がはりさけそうになるのよ。

1931年3月5日〔義母宛の手紙〕

エングルウッドにて

「ニャーオ」と鳴くボールをお贈り下さって、本当にありがとうございます。ドクターがあの子に予防接種をしたばかりで、まだ泣きわめいていた時に届きました。私があやしても駄目でしたが、あのボールの声で泣き止みましたわ。あの子は片方の手でそれをとって、バランスをとって、ひっくり返し、どの動きがあの子の声を出すのか発見して、真剣な興味をもって、それをまた繰り返しました。それから、もちろん落っことしてしまったのですが、壊れませんでした。

お風呂で遊ぶボールが、絶対に壊れないということをご存じでしたか？あの子の最近の芸当は、片方の掌だけでボールをとりあげて（どうやつのかわかりません。たぶん、あの子の掌の熱のせいでしょうか）、自分の椅子の脇に、吸引力がなくなるまで掴んでいます、それが大きな音を立てて落ちるのです。拾ってあげると、またすぐに同じことをします。あの子は今、大きなバスタブに入っていて、「ニャーオ」のボールに手を伸ばしたり、蹴ったりしていますが、あれが大好きなんです。

どうもありがとうございました。あの子は、ジフテリアの予防接種を受けて、天然痘のワクチンの注射も済みました。ホッとしています。

西への旅は、もう間もなくだと思います。おそらく、この前の吹雪のせいだと思いますが、チャールズをカリフォルニアに駆り立てたのです。

追伸

かわいいダッフィン（あの白い犬です。最高に勇気に満ちた、快活な犬で、コンと私の愛犬です）が、見物人に殺されたのです、この前庭で。連中は、車を乗り入れて来て（ものすごいスピードで）、あの庭をぐるっと回って、泣き叫ぶ動けなくなった犬をそのままにして、大急ぎで逃げ、止まろうともしませんでした。私は、怒りで煮えくりかえっています。

1931年3月10日〔妹宛の手紙〕

エングルウッドにて

親愛なるコン

私は、あなたと全く同じ気持ちだったの。エリザベスから電話が来た時に、最初は理解出来なかったのよ。

「誰？ 誰が？」

「ダッフィン、かわいいダッフィンが……。」

でも、私は死んでしまった彼を見ずによかったわ。私達は誰も見なかったのよ。獣医さんがここに着いた時（とても速く）には、ダッフィンは意識がなかったの。車をぶつけられた時に、一度だけ泣き声を上げたんですって。とにかく、獣医さんはモルヒネを注射して、彼が苦しまないようにしてくれたの。でも、あの子はそのまま死んでしまって、全然意識を回復しなかったのよ。

ああ、コン、みんな、ダッフィンのことがあんなに好きだったのに……。あの夜は、台所では誰も夕食が喉を通らなかったんですって。みんなひどく沈んだ顔をしていたわ。誰もがダッフィンのことでは、何かを言いたかったの。ヴァイオレットが、

「あのねえ、私は土曜日にピーターを洗ったんですよ。でも、ダッフィンは月曜日まで（お母様と私が、ここへ来るまで）洗うのを待とうと思っ

たんです。だって、あの子はまた直ぐに汚くなるでしょう。なのに、いなくなってしまうって、洗うこともないなんて、信じられません。」

この言葉は、私に微笑みも与えてくれますが、泣きたくもなるのです。

でも、ダッフィンが汚れたまんまで死ぬことほど、こんなにびったりの死には他にないわ！ 今日の散歩で、あの小道に沿っては歩けなかったわ。あそこは、私がここにいる間、いつもダッフィンと一緒に、毎朝散歩したところですよ。チャーリーが生まれる前の春もずっとね。

でも、今朝は行ったわ。そして、ジョージ（庭師）に野菜畑で会ったら、彼がすぐに、感じのいい「ルルル」という舌先で発音するスコットランドなまりで、「“かわいいダッフィン”のことは、とても残念でした」と、言ってくれたわ。そして、彼がどんなにあの犬達のことをうんと好きか、それから、犬達もどんなに彼が好きかということを、話してくれたのよ。私は、ダッフィンはまるで人間みたいだったって、言ったの。彼は、とてもやさしく瞬きをして、「時々、人間より立派だったと思いますよ」って、言ったのよ。

それから、ジョージは、野菜畑の中の小道のそばにある、“かわいいダッフィン”が埋められている場所を教えてくださいわ（あの子をかわいがってくれた人が、埋葬してくれて嬉しいわ、ジョージ）。私達がいつも散歩に行ったところよ。お墓全体に、ジョージがシラーを植えたの。小さく明るい青い花よ。本当に彼はやさしい人ね。ほとんどの男の人は、そうすることは“女々しい”ことだと思ったでしょうに、でもジョージは女々しくなんかないわ。彼はいい人で、親切で、スコットランド人なの。それから、彼が

「ダッフィンの代わりになる犬は、絶対見つかりませんよ」

って言ったの。そして、あの人達が車を止めなかったことを、私とまったく同じに、彼は怒っていたわ。

チャールズは、連中のことを撃ってやりたいと思ったはずよ。彼、すごく怒ってたわ。そして、「ダッフィンには、僕もすごく頭にくったこともあるけれど、でもあいつはカワイカッタな」って言ったのよ。

ピーターはすっかり寂しくなっちゃって……。誰かが言っていたのだけれど、ダッフィンが意識不明で横たわっていた時に、ピーターは立ってダッフィンを守っていたんですって。誰かがそばに寄ろうとすると、怒ってうなっただけなんですって。そして、エリザベスが帰って来た時には、ピーターは彼女を出迎えに階段から降りてこようとしなくて、階段の上で立ったまま遠吠えしたのよ。それに、初めの3日間は、何にも食べようとしなかったの。家の中は本当に寂しくなったわ。いつもダッフィンのことを考えているの。あの子は家庭の一部だったし、私達の一員だったの。どの部屋からも、彼は姿を消してしまったのよ。あの子がよくそこから飛び下りていた椅子に、彼の小さな身体がつけた跡が見えるわ。

イザベルが帰って来た時には、私は彼女の顔を見られなかったの。だって、彼女がダッフィンのことをかわいがっていたのを知ってるし、彼女とダッフィンの話をしたら、私泣いちゃうことがわかっていたもの。

私達、別の犬を探しているのよ。一つには、エリザベスのためを考えて（このことでは、彼女とても気落ちしているの）、それから、ピーターを元気づけるためよ。

1931年3月 火曜日の朝〔義母宛の手紙〕

プリンストンにて

本当は小犬⁽¹¹⁸⁾が着くまで待ってから、このお手紙を書くべきなのですが……。その犬が家の物を噛^{かじ}っても、私達が気に入ることはわかって

(118) ワーグーシュ。チャールズの母親から贈られたフォックステリア犬。

おります。たぶん、お母さまにいただいた敷物以外は、この家の中で、壊れる物は何にもありません。あの敷物は、家で噛ることが出来る一番良い物なので、その小犬が、敷物を好きではないことを願っていますわ。

カリフォルニアへの途中、デトロイトに寄るかもしれないと、チャールズが言っておりますが、もし私達が立ち寄れば、お母さまの休暇の時に目にかかれな分を挽回出来ますわ。そのことで、お母さまにお手紙を書いているのです。お母さまの休暇の間、あるいは少しだけでも、こちらに来て下さることは出来ないものかしらと思ひまして……。私達がここにいなくてもよろしかったら……。伯父さまいかがでしょうか。

あの子が、ここで一人になります。私はそのことが心配なのです。このスコットランド人の女の子は⁽¹¹⁹⁾とても良く出来た人で、子供の世話も完璧にしてくれるでしょうし、ドクターに連絡しなければならぬ時なども心得ていると思います。でも、おわかりでしょうが、彼女も、エルシーも、ホワットリー⁽¹²⁰⁾も、世間とか、記者達の対応ではほとんど経験がありません。彼等のうち、誰一人として、この国に来てからあまり長くはないので、まだアメリカの習慣をよく知らないのです。

よその子供達と違う立場なので、報道されたために起こる緊急事態のことを、私は考えているのです。我が家は、かなり無防備です。あの子は、外に寝ているのも同じです。あの子を常時注意して見ていなければ、誰でも入って来て、彼の写真を撮ったり、何でも出来ますわ。

たぶん、これは全く例外なのかもしれません。人々は、私達が留守にしているのを新聞で読んで、それにつけこむのです。少し頭の狂った人達もいます。私に手紙をよこしたあの女性や、ここの玄関まで来て、「あの子供に会わなければならない。生か死かの問題だ」と言った女性のように……。あるいは、もしかすると、私達が墜落したという噂もたちます（一度など、2週間の間に6回もです）。それで記者達が、《ことに

(119) ベティ・ガウ。チャーリーの子守り。

(120) オリヴァーとエルシー・ホワットリー。プリンスストンの所帯のために、リンドバーク夫妻が雇ったイギリス人夫婦。

よると孤児に》の写真を撮るために飛び込んで来たりするのです。こういうことを心得ていて、断固とした対応が出来て、用心もしてくれる、誰か信頼できる人の手に、私はあの子を頼みたいのです。

これでは、まるで、「私達が留守の間、お母さまに用心棒になっていただきたい」というように聞こえますわね。それは、気にかけないでいただきたいと思います。少しは、あの子をエングルウッドに行かせることも考えましたわ。祖母、エリザベス、グレアム夫人⁽¹²¹⁾が、必ずあそこにいますので、ここよりも人が侵入しにくい筈です。でも、お母さまがこちらにいらして下さるのなら、あの子がここにいる方が、私はずっと嬉しいのです。お母さまなら、そのような状況でも、対応出来るとわかっておりますから。もしかすると、お母さまの休暇とうまく合わないのかもしれませんが、あるいは、お忙しかったり、たくさんの用事でふさがっているのかもしれませんがね。でも、とにかく、これが私達のご招待です（あまりおいしそうな匂いはしません）。

お母さまが、私があの子を甘やかしていると思われるのではないかと、心配しておりますが、私は甘やかしたくはありません。あの子は、頭に^{こぶ}瘤を作ってもいいのですし、^{かんしやく}癩癧を起こしたのなら泣かせておいてかまわないのです。あの子の赤ちゃんの世界にあるそういったことすべて、そのままかまわないと思っております。でも、あの子の世界の外にある困難なことで、大人でさえうまく処理出来ないものには、彼をさらしたくはありません。

あらまあ、私はあの子を置いていくのが、本当に嫌なのですわ！ つまるところ、それだと思います。

チャールズは、新しい場所の木を切っています。今は、道が敷地の今まで敷かれて、土台のための掘削が始まりました！⁽¹²²⁾

(121) セシル・グレアム夫人。アンの母の私設秘書、ジョーのこと。

(122) ニュージャージー州、ホープウェル近くのサウアーランド・マウンテンズのリンドバーク邸の建築のため。

1931年3月

ワーグーシュが全く可愛らしくて、“ハリケーン”のようだったのは、あの子が着いてから最初の時だけでした。箱から出るのが嬉しくて有頂天になってしまい、暖炉のある部屋から、階段をかけ上がって書斎に行ったり、廊下を通して、ダイニングルームなどをグルグル巡り、猛烈に走りまわったり、片寄ってしまった敷物を後ろにこんもりと残して走り、1回ごとにもう1匹の小犬（生後10週間のスコッチテリアで、同じ頃に来ました）の上を転がるのでした。その後で、私は彼を散歩に連れて出て、原っぱで疾走したところ、やっと落ち着いて帰って来ました。

チャールズが部屋に入ってくると、即座に自分はチャールズの犬だとわかったようでした。ワーグーシュはチャールズに飛びつき、彼の膝に乗って、興奮してそこら中で体をくねらせていましたので、チャールズはとても喜んでいました。彼が何とお母さまに話したのかよくわかりませんが、チャールズはすぐにワーグーシュに芸をさせる作業にとりかかりましたが、犬はそれが大好きなのです。最初の夜には、“ふせ”を教えました（私は、お母さまがそれはすでに教えられたのではないかと、にらんでおります）。チャールズが、ワーグーシュはとても賢い犬だと言っていました。本物の犬で、元気いっぱいですわ。

ワーグーシュは、最初の日からチャールズの後について歩きました。朝、チャールズが町に出かける時、玄関でクンクンと鳴きます。彼は驚くほど愛情の深い、やさしい気質の犬です。あまり坊やをかまってはいけないのだということが、だんだんわかってきています。（いつも飛びついて、坊やの顔を舐めたがるのですが、あの子が泣けば泣くほど、ワーグーシュはもっと慰めたくなるのです）チャーリーは、ワーグーシュを怖がってはいませんが、途方にくれているようです。

ワーグーシュは、下の躰が完全に出来ていて、のみこみが早いのです。

2匹の犬は一日中遊んでいます、ワーグーシュは決して小さい方の犬を傷つけるようなことはしません。小さい方の犬が、時々噛みついたりします。彼等は（手袋や、ハツカネズミや、鳥を与えたのですが）、電気のコードやバスマット、木炭の破片、スーツケースの取っ手、それから、はいている靴の紐を噛むことを覚えてしまいました！

1931年3月24日 火曜日〔母宛の手紙〕

プリンストンにて

親愛なるお母様

日曜日に坊やの2本目の歯が生えてきて、丸々と太って良い血色をしています。よく外で遊ぶので、あの子のほっぺはりんごのようです。今はドゥワイトのカップで、ミルクも良く飲みます。土曜日はまるで春のようでした。私はローラ⁽¹²³⁾を捕まえて、一緒にプリンストンまで車で出ました。外で坊やを乳母車に乗せて、林檎の木の下に行き、腰掛けてあの子を眺めながら、すっかり幸せを感じました。ステイブンス夫妻は週末に泊まり、日曜日に、新しいところの木を切りました。

楡のつぼみがちょうど開き始めていて、ふんわりと柔らかそうです。

私達のところでは今、犬を2匹飼っています。私達が9ヶ月のスコッチテリアを買った次の日位に、ワーグーシュが、デトロイトから着きました。私達を買って来た犬は、スキーンと呼んでいます。これは、ゲール語で“短刀”という意味です。ワーグーシュは、誰かが部屋に入る時には飛びついて来て、上着をかきむしらないと入れてくれないような犬です。スキーンは靴の紐を噛むのが好きです。

私達は、今週末か、来週の初め（必ず）には、つまり3月の29、30、31日⁽¹²⁴⁾には出発する予定です。チャールズのお母さまが、留守にする

(123) ローラ・プラント。編集者ジョージ・ステイヴンスと結婚した。

(124) カリフォルニアへの旅行が計画されていたが、後に中止になった。

前半の間、ここにいて下さると思います。その後は、もし、おばあちゃまかエリザベスがエングルウッドにいれば、あの子を行かせます。

ローラと楽しいお喋りをしました。彼女はとても幸せで、少しは落ち着けるような年になったと思っています。でも、私はそうではありません。私は10年先に感じるよりも、今の方が年をとっているような気がするのです。突然やって来る強烈な時間の感覚、人は変わり、去り、また他の人々がその位置を占め、あたかも回顧しているかのように、その周期が加速されて……。子供を生んだことが、私をそんな気持ちにさせるのだと思います。

私はここで暖炉のそばに座っていますが、傍にはワグーシュとスキーンが体を伸ばして眠っています。チャールズは、夕食もとくに済んだというのに、まだニューヨークにいます。彼はロックフェラー研究所に

時

1931年4月〔義母宛の手紙〕

エングルウッドにて

親愛なるお母さま

お母さまがこちらにいらっしゃらないと伺って、とても残念です。チャールズが非常にかっかりしていました。でも、いらして下さいと、何度も何度も頼まれるのは嫌なものです。たぶん、私達はしつこくお願いしすぎたのだと思います。デトロイトでお目にかかります。私は出発を待っているのが嫌になってしまいましたので、お母さまは、

「私達は月曜日（火曜日、水曜日、木曜日、土曜日……）に出発すると思います」

と書いてある手紙に、もっとうんざりしていらっしゃることでしょう。

(125) チャールズは、ロックフェラー医学研究所で、フランス人の外科医で生物学者、アレクシス・カレル博士と人工心臓装置の共同研究をしていた。

この1週間というもの、チャールズには、仕事で大きなプレッシャーがかかっていました。調査とか、そういったようなことで、会議も夜中の12時30分まで続いたりしていました。⁽¹²⁶⁾

彼がそんなふうには仕事をするのを見たくありませんが、ニューヨークの暮らしからのプレッシャーが大嫌いなので、それに自分を引き込まれるようなことはないと思います。私達はこの2、3日エングルウッドに來ています。通勤には、家よりも便利なものですから。

これは急ぎのお手紙です。1月程前に撮った坊やの写真は何枚かと、チャールズの写真を1枚同封いたします。チャールズが撮った写真ほどよくありませんが、お母さまがご覧になりたいのではないかと思います。あの子はニコニコして、お母さまの下さった子羊に手を伸ばし、それから愛情をこめてその首を絞めますわ。

1931年4月4日〔母宛の手紙〕

エングルウッドにて

愛するお母様

今朝は、チャールズのお母さまが休暇の時に来られないとのことでしたので、ホワットリーに電話をして、坊やとベティをここに連れてきてもらいました。そうすれば、アニー伯母様もあの子に会えます。それから、チャールズと私はイースターの間ここに泊ります。

来週出発したいと思っています、飛行機事故で遅れていましたが。

カンザスでの、ウェスタン航空のこの間の飛行機事故のことで、チャールズにはプレッシャーがかかっていました（ウェスタン航空は、TATと合併したばかりです）。明らかに、（まだ正確な報告はありませんが）この事故は悪天候の中を飛んだパイロットの判断が誤っていたからではなく、

(126) TATとウェスタン航空のフォッカー機の墜落に関連している。この墜落でヌート・ロックニーと他に7人が死亡した。飛行機は、カンザスシティからウィチタへ向かう途中だった。

プロペラに欠陥があり壊れてしまい、翼桁を切ったので翼の一部が落下したために起きた事故です。前例の無い事故です。こんな事故が起きたという話は、聞いたことがありません。滅多に起きない事故でした。でもその事故では、乗客全員が死亡しました。このニュースには、私は本当に具合が悪くなってしまいます。

1931年 4月19日

エングルウッドにて

親愛なるお母様

私達は、カリフォルニアへ行きません。いずれにしても、今は行きません。初夏に旅行することになるかもしれませんが、長い旅行ではありません。私はエリザベスと一緒にいられることが嬉しくて、とっても嬉しくて、それに当分エングルウッドに滞在出来るのよ。ナッソーで過ごしたのがとても彼女のためになり、嬉しそうで見違えるほど元気になりましたが、度を越さないように、うまく舵をとる機転が必要です。彼女には新しい恋人がいて、それは結構なのですが、これにも機転が必要です。これから先、彼女には夏や余暇の時間等、多くの時間があるので良かったと思います。

ブリタニーでのドライブが彼女のためになるとは、私は思いません。誰にとっても疲れるものですが、エリザベスはドライブを無理に続けようとするでしょう。起点を設けたらどうでしょうか。どこかの海岸の町に滞在して、ある半径の中でいろいろな方向にドライブに行ったらどうかしら？ そうすれば、エリザベスは常に進まなくてもいいわけです。お母様たちが2人で出かけて、1人がエリザベスと残ればいいと思います。

坊やは、とても大きくなりました。ベビーベッドやベビーサークルの中で、一人で起き上がります。それから、前よりもよく遊ぶようになり

ましたし、誰かが手を振ると、自分も手を振って「バイバイ」をします。あの子の髪の毛は、巻毛で金髪、肌は日焼けして、この頃の暖かい春の陽の中で薔薇色に輝いています。人の区別も、ずっとつくようになり、知らない人のところへは行きませんが、私やベティにはしっかりと可愛らしく、掴まっています。

1931年 5月2日 土曜日〔妹宛の手紙〕

ニューヨークにて

すてきなコン

ここに書き表すには、人生はあまりに複雑になっているの。エリザベスと新しいボーイフレンドのことよ。彼女は楽しく陽気に、若くてとても綺麗で、火花のようにきらめいているでしょ。「Rが小さかった時、……とても苦労したのよ。それから……。」

彼女が、またあんな風になったのを見るのはいいわよ。もし、彼女が疲れ過ぎなければね。でも、

1) 彼女が感情的に動揺しないようにするために、体調が悪くならないようにする。

2) 彼女が、体調が悪くならないようにするために、感情的な動揺を与えないようにする。

これには、大変な思いをしているのよ。わかった？

私は、今度の旅行⁽¹²⁷⁾に持っていく洋服の新聞広告を、安全ピンやペンで、一生懸命切り抜いているの。

「ローヒールですか？ いいえ、奥様、ここにはございません。女学生用の売り場にいらしてみてください。」

「あもう、その色と同じ色の上着じゃない方がよくありませんか？ はっ

(127) リンドバーク夫妻は、彼等のロッキード社製のシリウス単葉水上機で、カナダ、アラスカ、シベリア（カムチャッカ）経由で、日本と中国に行く東洋への探査飛行に出かける準備をしていた。

きりしたコントラストの方が、ずっといいと思いますけれど……。」

「いいえ、でも、お取り寄せは出来ますよ。」

「お客様のご希望のサイズはございませんが……。」

「仮縫いの人を呼んで、ピンであげてもらいましょう。そうすれば、もっとよくわかりますから……。」

(あーあ、やれやれ！ だわ)

ジェーン・オースティン^{*39}を読んで、神経を鎮めています。

.....

ジョーが私に、

ジョー 「昼食には、青い靴をはけばいいんじゃないの？」

アン 「すぐに擦りへるのよ。とっておくの。」

ジョー 「とっておくですって！ 何のためにとっておくの？」

何なの本当に？ 何のためだか、誰のためだか……。あなたちょっと、人生でここら辺まで来たら、あなたにもわかるわ。青いハイヒールを誰かのためにとっておくような、そんな相手がいなくなるのだから……。

いつ帰ってくるの？ あのハイヒールは、あなたと会う時に履くわ！

1931年5月10日 日曜日〔義母宛の手紙〕

親愛なるお母さま

この1週間、毎日ロングアイランドのアヴィエーション・カントリークラブまで飛んで行って、チャールズは私をとて厳しく鍛えています。ほとんど毎晩あそこで夕食をとり、時々、夜も泊りました。うまく行った日もあれば、駄目な日もありましたし、少し叱られたりしました。どんな風かおわかりでしょう。私はこれまでに、約2時間の単独飛行の訓練を受けましたので、あと8時間訓練を受けると、プライヴェートの操

*39 イギリスの作家(1775~1817)。イギリスの小説家の中では、最大の芸術家だといわれている。『分別と多感』『自負と偏見』他の作品がある。

縦士免許の申請が出来るようになります。⁽¹²⁸⁾ヘンリー・ブレッキンリッジ大佐は、この免許を持っていらっしゃるのです。お母さま、御存知でしたか？ 私達は、エングルウッドにも行きました。父と母が帰ってきたばかりです。ですから、かなり忙しかったのです。

みんなが、「坊やは、ますますチャールズに似てくる」と、言っています。お母さまが、「あの子はあの子自身になって行くだけで、誰だってそれで満足」と、おっしゃっていたのは知っておりますが、でも、あの子がチャールズに似てくると、私は嬉しくなります。あの子の髪の毛は、ますますクルクルの巻毛になって、金髪になってきます。目には本当の輝きがあるのですよ。

あの子は、今、とても早くハイハイをします。人の後について部屋から這いだし、椅子やテーブルにつかまって立ち上がります。

「もっと」(シリアルや人参等を)「いや」のような言葉がいくつかと、それから犬の名前が理解出来るようです。チャールズはあの子に興味を持ち始めています。それから、あの子はチャールズの膝につかまって立ち上がります。あの家の辺りには花水木が満開で、行くたびに美しくなっています。

1931年7月17日〔母宛の手紙〕

ニューヨークにて

愛するお母様

来週出発すると、チャールズが言ってます！⁽¹²⁹⁾来週末になると思います。ノースヘイヴンに私達が寄ることが出来るかどうかについて、彼ははっきりとは言いませんが、「たぶん寄れると思う」とは言っています。私にとっては、とても大事なことなのです。彼にもそう言いました。

(128) チャールズはアンに、複葉飛行機のバード機で飛行の教習をしていた。「序章その1」を参照のこと。

(129) 5、6、7月は、東洋への探査飛行の準備のために費やされた。アンは、プライヴェート操縦士の免許を取得し、無線操縦の勉強をしていた。

でも、私達はちょっと様子を見なければなりません。

カレッジ・ポイント（フラッシングの近くの、ロングアイランド）のエド・ボンツーン社の栈橋から出発して、ワシントンへ行きます。チャールズは、出かける前に一晚、ワシントンに寄らなければならないようです。その後、たぶんメインに寄ることになるでしょう。

お母様とあの子と一緒にメインにいたるところに、是非行きたいわ。緊張して出かけたくないという私の気持ちの後ろに、気持ちの良い落ち着いた安堵している部分があるのですが、それを分析すると、こうなります。

「あの子はお母様と一緒にノースヘイヴンにいる」

です。このことで、私がとても幸せだと感ずるのは、あの子が安全で、元気で満ち足りて可愛がられることがわかるからだけではなく、一種の利己的な喜びもあるからです。私の一部があの子と一緒にあそこにおいて、その場所がメインで、一緒にいるのがお母様だからです。

あの子の行動の記録をつけておいて下さいね。それから、一月に一回位、写真一枚撮って下さいませんか？ ペティには、一度にあまりたくさんのおもちゃを与えないようにさせて下さい。一つか二つだけを、時々変えるようにと。それから、他の人があの子をちやほやしないように、少しぐらい転んだり、間違ったことをしても気にしないように……そうして下さる？ お母様なら万事うまくやって下さるという自信がありますので、私は心配していません。

1931年 7月22日

ニューヨークにて

愛するお母様

私達は、今にも出かけるところで、地図を作成しているところです。チャールズは、ワシントンからオタワへの途中、メインに寄れると思っ

ています。でも、これは絶対の秘密にしておかなければなりません。月曜日にはワシントンへ発てると、彼は考えています。そして、月曜の夜（おそらく、火曜の夜も）ワシントンに泊り、それからノースヘイヴンに飛んで、その夜にはノースヘイヴンに泊ります。

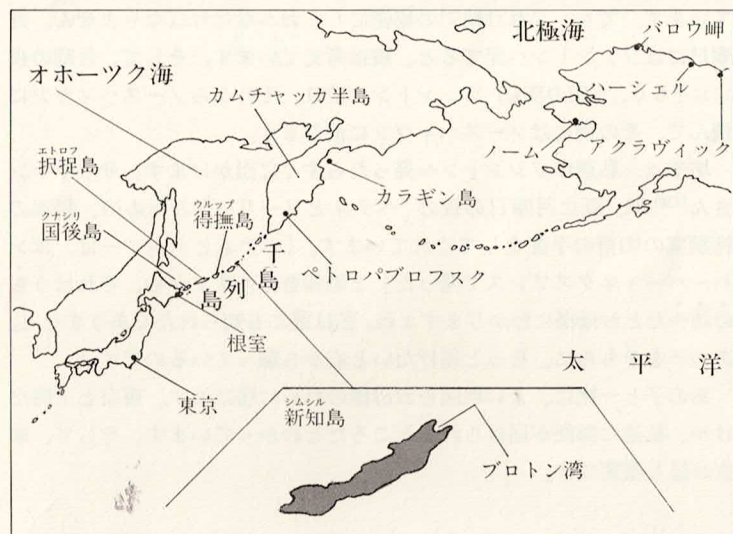
坊やは、私達がワシントンへ発ったらすぐに出かけます。サリヴァンさん⁽¹³⁰⁾が、既に月曜日の夜の“ペティとメーリー”のための、列車の特別室の切符の手配をしてくれています。「ペティとメーリーは、ボンハーバー・エクスプレスで発った」と電報を打ちますから、それはうちの坊やだとお母様にわかりますよね。私は誰にも知られたくありません。あの子をそちらに、そっと届けたいと心から願っているのです。

あの子と一緒に、よい地図をお母様のために届けます。東京と上海だけが、私達に郵便が届けられるところだとわかっています。そして、東京が最も確実です。

リンドバーグ夫妻は、7月29日にメイン州ノースヘイヴンの海峡に着水し、ディーコン・ブラウン岬に泊った。この時の旅行のことはすべて、アンの著書『東方への空の旅』(North to the Orient)に書かれている。^{*40}

(130) キャサリン・サリヴァン女史。アンの母の私設秘書。

*40 巻末の「覚え書き」を参照のこと。日本では戦前に刊行されている。



1931年8月6日〔母宛の手紙〕

アクラヴィックにて

愛するお母様

ここが、手紙が出せる最初の場所です。航空便が2週間に1度、ここから出されます。おそらく明後日には出ると思います。お母様、ここまでは最高に不思議な旅でした。とってもエキサイティングで、これまで

にない旅でした。何ヶ月もどこかへ行っていたような気がします。この間の晩、飛んでいる時に、私はあの子の夢を見ました、それは別の世界のようなものでした。私に子供がいるなんて、信じられませんでした。あの子がお母様と一緒にいるところを、想像するのが大好きです。

お母様にお知らせすることが、あまりにたくさんありすぎて……。オタワでは、大勢の人々に会いました。チャールズが行きたかったルートを飛ばないように、私達に忠告した飛行家達。彼等は、チャールズに、爆竹で遊びたがっている小さな男の子に、大人が注意するように、話したのです。さて、このローマ花火だって、爆竹と同じようにエキサイティングで、それにもっときれいですよ。同じくらいの興奮を、ローマ花火からだって得られますよ——とても言うように、

「ところで、このルートですが、あなたにとっては全く未開のところですよ。このルート全体に沿って、キャンプがあります。」

「でも、私達は既に整っている航空路に沿っては、行きたくないんです。」

「ああ、それは整った航空路なんかじゃありません。かなり未開のところですし、それにそのルートより、ちょうど3、4キロは長いのです。」

「なるほど……、でもあなた達は結局、全員ここに戻って来ましたがね？」

それは、ものすごく可笑しかったのです。それから、チャールズがついに、少し苛立ったのです。小さな男の子が、「もう君とは遊ばないから、お家へ帰っちゃうもん」というようにね。

「わかりました。私達に、その航空路で行くなと言うのなら行きません。帰りますよ。それから、グリーンランドの上を歩きますから！」

みんな浮かぬ顔になって、

「えっ、それはもっと悪条件ですよ。」

やっと、みんなが考え直して、一人ずつチャールズに、

「申し上げたいことは、たった一つだけ。あなたの航空路を寸分変えないでもらいたいですね！」

その後、何百も何千もあるカナダの湖の上を超えてムースファクトリーへの飛行。全くの平らな地域で、高く細い松の木が生えています。

ムースファクトリーには、流れの緩い、水面が鏡のように穏やかな川があり、その緑の土手に、白い家が2、3軒ありました。赤い屋根のどっしりとした白い教会が一つ、赤い屋根のしっかりとした感じの家が（ニューイングランドにあるような）が9軒か10軒、英国旗を揚げた白い旗ざおが1本、白く塗られた柵が前庭を囲み、浜辺には白っぽい灰色のテントがあり、魚が干物にするために吊されています。

鏡のような川面を切って進んで来る、カヌーのパツパツという音以外は、全くの静寂の世界。地平線はどこを見ても、細く鋭い松の木が空を背景に立っています。

地元のインディアン達が、私達とハドソンズ・ベイ社の男性達を出迎えてくれました。それから4名ほどの白人女性達も。私達はハドソンズ・ベイの社宅に滞在しましたが、とても古い家でした。1650年頃に出来たハドソンズ・ベイの交易場の一つです。

その家は大きな厚い板で造られたもので、巨大な古い鍵がドアにかかっていた。スコットランドのアバディーンの、感じの良いウェスト夫妻（ハドソンズ・ベイ社の人）が、私達の世話をしてくれました。新鮮なへら鹿の肉とレタス（島で採れた）、缶詰のラズベリー、缶詰のパウンド・ケーキと紅茶のお食事を出して下さいました。かなり暖かく、蚊がたくさんいました。でも、がっしりした家々は、壁になんの飾りもなく、白い塗料が塗ってあり、冬を思わせました。大きなストーヴが家中を暖め、防風窓等もあります。

夕食の後、私達は騎馬警察（カナダ全国で、狩猟法等を守るための警察。全員、立派で、きちんとしたスラリと背の高い男性達）とミッションスクール（英国国教会の）を訪問しました。英国国教会の司祭が一人とカナダ人女性の教師が二人、インディアン達のために学校（寄宿学校）を開いていて、洗濯から、食事から、彼等の世話をしています。ノースウェストテリトリーの司教がそこに来ていて、女性が二人（一人は非常に若い人）いましたが、彼女達は、一人は教師として、一人は看護婦として、5年間、はるか北のパツフィンランドへ行くところでした。

若くおとなしい看護婦は、今まで一度も北へ行ったことがないそうです。あそこでの5年間のことを想像して、私はとてもうんざりしました。船は一年に一度、同僚の女の人もいなくて、宣教師が一人、騎馬警察官が一人、交易場が1軒、それからイヌイットの人達がいるだけです。彼女はあまり話をせず、私は「素晴らしい先駆者となる仕事をする」ということ以外に、何にも激励の言葉がみつかりませんでした。それを聞いて、彼女の顔にほんの少し満足そうなきらめきが見えました。

彼等は、夜の10時に私達のためにお茶を用意してくれました、それからとても甘いクッキーも。何人かの女性達は、数年間外へ出たことがなく、彼女達の洋服は、チャールズの好みにとってもびったりです。膝丈なのです。その方がずっと、着やすく快適です。そこに住む人達の中には、スコットランドやイギリスから船で直行したので、カナダ国内の他の土地をどこも見たことがない人もいます。熱心な司祭が、春に雪が解けると大きな木の杭でしっかりと固定しなければならない教会を見せてくれました。この司祭はインディアンの言葉である、クリー語を知っていてクリー語の賛美歌集を見せてくれました。こんなふうにあります。



「優しき光よ、導き給え」等、いろいろな三角形に置き換えられています。

彼は自分の育てた飛燕草^{ひえんそう}を誇りにしていました。とても大きくて青く伸びていました。前任の司祭に捧げられた銘文と、その功績の記述も見せてくれましたが、それを見て、彼はそこで働くつもりになったのです。彼の目には熱くキラキラと輝くものがありました。どうやって、その努めを果たしているのか、私にはわかりません。

ウェストさんの奥様には、アバディーンにハドソン海峡で生まれた6歳の男の子がいます。彼女のお姉様のところに預けて来たけれど、とても幸せにしている、そのお姉様を「ママ」、そのご主人を「パパ」と呼んでいるそうです。それを聞いて、私はそう感じませんでした。彼女にとっては、明らかに慰めになっていました。

チャーチルへの長い飛行。松の木はもうなくなり、私達はハドソン湾に沿って、湿地帯の島々の上を何キロも何キロも飛びました。一度、この飛行の間、浜辺にインディアンのキャンプと、テントとボートを見ました。彼等は夢中になって、私達に手を振っていました。それから一度、川の港で2本のマストのついたスクナー船（縦帆式帆船）を見ました。要するに、湿地と荒涼たる未開の広がりだけで、何にも見えないのです。

チャーチルには、夕方に着きました。湾には岩が突き出していて、反対側に川があります。屋根の高い大穀物倉庫（あの荒涼とした土地には驚くほど不釣り合いな）と、何十軒もの白い家がありました。澄みきった明るい午後でした。私達が着いたのは、現地の時間で6時半頃でした。秋のように、凜^{りん}として少し寒く、なるほど北に来たという感じがしました。あの吹きさらしの家々の白い側面にさす、冷たく明るい光は、エドワード・ホッパー^{*41}の描く絵画のように見えました。

北極星は、ますます私達の真上に近づき、オーロラの最初の一筋の光

*41 アメリカの画家（1882～1967）。平面的に描かれた静寂で孤独な雰囲気をもたせた建物や人物を描いた。

を見ました。ここには木がありません。灌木林と花だけです。

河口の上を飛んでいる時、イルカが泳ぐように、大きな魚がジャンプしているのが見えました。あれは、白イルカだと、教えてもらいました。

午後遅く、ペーカーレイクに着きました。うすら寒くジメジメしていました。鏡のような湖と、灰色の寒々とした岸辺です。灰色の苔以外は、何も生えていません。がらんとした岸辺に、4軒位の家と教会が建っています。男性が全員（8人いました）で、私達を出迎えてくれましたが、イヌイットの人達がもっとたくさん来ていました。

あそこには、白人の女性が行ったことがないので、私は大変な珍種[・]なのです（でも、期待はずれだったと思います。ズボンははいていましたから）。あのがらんとした岸辺に降りた時に、一番最初に目に入ったのは、きれいなレタリングが施してある白い丸太小屋でした。

「レヴィオン兄弟商会、毛皮製品」とありました。レヴィオン兄弟といえば、垢ぬけて活気のあるニューヨークの五番街を、私は思い浮かべるのですが、これほど似ても似つかないものはありません。

私達は、蚊が飛び交う中を通して、レヴィオンの男の人達が住んでいる、小さな白いバンガローに入りました。無線通信技師のこぎれいな血色のよい小さなスコットランド人が一人、イギリス人が一人、ハドソンズ・ベイ社の男性が二人、騎馬警察、カナダ人の測量技師、毛皮のわな猟をする猟師、英国国教会の司祭、ローマン・カトリックの司祭——の全員が入って来て、大きなテーブルの周りに座り、私達を見ていました。一番滞在期間が短い人は、一年前に来た人です。船は、一年分の供給食料を積んで、一年に一度だけやって来ます。郵便物もです。ある人は6年以上いて、一度も他の土地に出て行ったことがありません。

「外はどんなふうですか？」

と、彼等は言いました。みんなで、よその土地のことを話します。今年の船は、あと約2週間後に来ることになっているので、かなり不足しているものがありました。煙草、本、紙はもちろんありません。そして、彼等は一年間、新鮮な肉や野菜や果物やお酒も口にしていません。私達が何も持って行かなかったことを考えて、チャールズも私もギクリとしました。時々飛行機がちょっと立ち寄るのだらうと、私達は思っていたのです。でも、私達はオタワでのピクニックのランチの残りのプラムが3つ、梨が1つ、それとお肉のサンドウィッチが4つありしたので、それを彼等にあげて、私達は湖でとれたおいしい鮭と、缶詰のラズベリー、そこで焼いた酸味のあるパンをいただきました。

彼等はピッツバーグからの放送を、冬中聞けるラジオを1台持っていて、夜になるとラミーとブリッジをします。でも、英国国教会の人はトランプをしないので、1組しか出来なくなります。ローマン・カトリックの神父様はトランプもするし、お酒も飲みます。イヌイットがたくさん住んでいるテントは、たった二つ位しかないのに、この方達はどうやってイヌイットの人達を分けあったのかわかりません。

私達の部屋は快適でした。これもどうやって、彼等がそうしてくれたのかわかりません。ここの方達は、皆さん私達にとっても良くして下さい、彼等はまたとても陽気でした。翌朝には、全員がカメラを持ってきて、イヌイットと一緒に私達の写真を撮りました。見上げると、騎馬警察官が、得意そうに“おばあさん”の手をとって岸辺を連れてくるのが見えました。彼女は小柄で皺がたくさんあって、歯がありませんが、ニコニコしていました。キャラコのスカートをまとっていましたが、ケープのように肩のあたりからはいていました！ 嬉しさを表わす面白い唸り声を上げ、私達が彼女を見るとくすくす笑いました。

お母様、もうこれでおしまいになります。チャーリーに私からのチュ-

をしておいて下さい。それから、あの子の巻毛を撫でてあげて下さいね。

1931年8月8日

アクラヴィックにて

愛するお母様

私達はベーカーレイクを午後遅く出発しました。晴れわたった日でした。小さなお花が地面いっぱいに咲いています。茎の短い柳蘭や黄色い芥子けしの花です。ここで投函するために11通の手紙を預かってきました。

波が荒かったのと、飛行機の自動スターターがこわれてしまい、チャールズが外でクランクを回さなければならなかったもので、離陸するのにかなり苦勞してしまいました。私は前方のコックピットに座って、エンジンの点火装置のスイッチを入れたり、切ったりしなければなりません、ということは飛行機が動き出すと、迅速な軽業師のように動かなければなりません。私は前方の座席から這い出して、翼の後部に沿って自分のコックピットに上らなければなりません。その後、チャールズは前のコックピットに飛び込まなければならないのです。それも全部、飛行機が水面を移動している間に行うのです。

1931年8月10日

バロウ岬にて

私たちはベーイカーレイクから夜通し飛びました。約12時間、白夜の中でした。何時間もの間、私たちの片側に霧の海があって、太陽がその中に沈むのでした。反対側には、死んだような灰色の平原がどこまでも広がり、まき散らしたような湖がありました。湖は、曙のようなブルーグレイに光っていました。太陽は最後には沈みましたが、あそこ（アクラヴィック）に着くまで黄昏なそがれでいました。中間点付近のコロネーション

湾近くで（ヴィクトリア島）私は、コパーマイン局に無線を一方的に発信しました。それから、ニューヨークには短波を送りました。コパーマインへの通信は届きましたが、私の方は相手の声が聞こえませんでした。

アクラヴィックは巨大な三角州にあります。陸地より水面の方が多く、何百という川や流れが入り組んで曲がりくねり、あちこちで縦横に交差して、まるでこんがらがった糸のようです。高木限界がここまで来ていて、少しは暖かです。

私達はあの不思議な灰色の曙の中、松の木が生えている岸に挟まれた鏡のような川の一つが湾曲しているところに、着水しました（とても眠かったのです）。ぬかるみの上に飛行機がもう一機。そこはかなり大きな居留地で、家が20戸、教会が2軒、無線用マスト等があります。熱狂的な人達が着飾って手を振っていました。川岸には、毛皮の裏がついていて、表は鮮やかな色のキャラコのパーカを着たイヌイットがいました。女の子達は裾にラッフルのついた長いスカートをはいています。

人々が殺到して出て来て、写真を撮りました（朝の3時に！）。私達はぬかるみの川岸までシリウス機を進め、エンジンを切りました。初めて聞くやかましい声が聞こえました。遠吠えをする犬達が、狂ったように騒いでいるのです。吠えているのではなく、コヨーテのように遠吠えをしているのです。冬に犬ぞりに使うためのハスキー犬達です。みんな柱に鎖で繋がれていて、自由になろうとして跳んだり鎖を引っぱったりしていました。ほとんどが全く人になれていなくて、見知らぬ人には飛びかかりますし、一つの群れが別の群れに向かって行って喧嘩をします。

泥んこの川岸を歩いて、小さなバンガローに行きました。私は黒いブラインドを下ろして、その中に沈んでしまうことの出来るような深く暗い夜の感じを創ろうとしました。昼光の中で眠りにつくというのは、考えるのも嫌です。私はとっぷりと沈み込める、黒い夜の果てしない深さ

が欲しいのです——眠りにつくために。

この辺りで、たった一人のドクターのお宅に泊りました。彼が診療をしているいくつかの場所には、小さなボートに乗るか、冬には犬ぞりで、一年に一度しか行けません。彼は歯も抜き、子供もとりあげ、盲腸炎の手術もし、結核の治療でも何でもします。ドクターとその奥様が私達を受け入れて下さって、自分達のベッドに私達を寝かせて下さいました。奥様はとてもやさしい方で、初めての赤ちゃんを間もなく出産されます。家の中にはもう一つベッドがありましたが、お友達が1人泊っていらっしやいましたので、奥様が一体どこで休んだのかが未だにわかりません。たぶん、バスタブの中でしょう！ この町でたった一つのバスタブが、このお宅にありましたので。それはブリキのバスタブで、やかんでお湯をいっぱいにはるのです。お蔭で、私はとても気持ちのよいお風呂をいただきました。

彼等は私達にとっても親切にして下さり、あらゆるものを出して下さいましたのです。それは大変なことを意味しているのです。というのも、彼等の生活物資の供給は船で来るのです。夏の間は船が3回、冬の間は2回か3回の犬ぞりで。それから、夏と冬に2回か3回の航空便が来ます。

ここには、イヌイットとインディアンの両方がいます。イヌイットの人達は、会うと必ずにつこりします。そして、実にかわいらしい赤ちゃんが、胴の周りに縛った紐一本で、パーカを着た母親の背中におんぶされています。時々寒いと赤ちゃんが全く見えず、母親の背中の塊だけが見えます。

私達が到着した次の日の午後に、かわいいイヌイットの子供達がみんな大声で叫んでいて、どの犬も遠吠えをしているのが聞こえました。私達がバンガローから出てみると、

「船が来るよ、船が！ 見て、煙だよ！」

と興奮して教えてくれました。何キロも向こうの木の上から煙が上がるのが見えました。船はゆっくりと川を上がって来ます。船が姿を現した頃には、それを見ようとして、男も女も子供も犬も全員が、ぬかるみの川岸に下りていました。そこに居ないということは悲劇でした。

「ああ、気の毒に、ケイときたら、病院で勤務中で見られないんだから！」と誰かが言いました。

古い白い船（ハドソン川の遊覧船のような）が、外輪を激しく回転させ泡をあげながら、大きなはしけを曳行していました。誰もが想像に耽っていました。

「たぶん、私の靴が乗っているわ！」

「ガソリンをあまり積んでいないようだが、もっと中にあるだろうな。」

「あの新種のアスキュー犬達を見ろよ。シェパード犬の血がかなり混じっているんだな。他の犬みたいに強そうじゃないな。」

「お母さんが、たぶん、新鮮なトマトを送ってくれたと思うわ。」

ミッションスクール（ローマン・カトリック）の、女の子達が赤紫色のバンダナを頭にまき、白い帽子をかぶり長いスカートをまとった修道女達（モントリオールの聖フランシスコ会修道女）に先導されて、行進してきました。

住民がぞろぞろと船に乗り込み、とても興奮して、荷物の目録にさっと目を通していました。

「バスタブが着いたぞ。おまえさん、俺たちにもういばれないぜ。ちゃんとしたバスタブだぜ。」

「家のモーターボート用の新しいタンクだ。間違ったやつを送ってきたぜ！ おい、レニー、間違ったのを送ってきたぜ。あいつらに全部仕様を送ったっていうのに、使えないじゃないか。来年まで待たなきゃならないじゃないか。」

私達の友人、ドクター・ウルクハートと奥様は、ミッション・ドライ・オレンジードの大きな樽、クッキーとかそんなものを何箱か。それからベビーベッド、バシネット*42を手に入れました。そして翌日の夜、夕食の時に、騎馬警官と一緒に新鮮なトマトサラダをいただきました。

ここには小さな病院が2軒あります。英国国教会と、ローマン・カトリックのものです。英国国教会の病院にはたった2人の看護婦が、看護と夜勤とベッドの周りの掃除まで全部しています。私が話をした看護婦の方はとても希望を失っていて、疲れていました。1ヶ月間5時間以上眠ったことがなく、そんなに眠っていないのです。

病院には数人の子供達がいる、その中の一人に15歳で二人目の子供を産んだイヌイットの少女がいました。そして、この人達はまたずっと産み続けるのです。バロウでは、プロワーさんの子供達の写真を何枚か見たので、「お子さんは何人いらっしゃるのかしら？」と聞いたところ、「17人。25人だと言ってる人もいます」という話でした。

ローマン・カトリックのミッションスクールと病院は大きな古い今にも倒れそうな建物で、少年少女が大勢います。床に届きそうなたっぷりしたグレイのスカートをはいて、大きな前プリムが突き出たボンネットをかぶった修道女達は、明るくすべすべした顔をしていました。ほとんどはフランス人（フランス系カナダ人）で、とても明るく陽気でした。

私達は女子生徒の教室を見ましたが、子供達が鳥の巣や紙の鎖の飾りや、紙の堤灯を作って、部屋の中に吊してありましたが、全部が色のついたキリストの絵を飾るものでした。男子生徒の教室には、なつかしい忘れな草と、ピンクの薔薇で飾ってあるヴァレンタインのキュービッドを乗せた飛行機が、天井から吊してありました。

「オトコノコー、トデモヒコウキニー、キョウミデス」

と、やさしい顔をした修道女が説明してくれました。

*42 幼児用のポータブル浴槽。

遊戯室では、女の子のグループが洋服を作っていました。それも立派な洋服でした。洋服の仕立て方や靴の作り方が教えられています。修道女達が、少女達に歌を歌うようにと頼みましたが、彼女等はとても恥ずかしがり屋で、やっと向こうを向いて固くなって、高く甘い鼻にかかった声で、

♪ヤウコソ、ヤウコソ、ヤウコソ、キョウハハ
と歌い始めました。

それから修道女の一人が、窓辺の鉢から（外ではほとんど何も育ちません）スイートピーを1本摘んで、私に上げるように、一番小さな子供に渡しました。他の子供達はそれを見ようとして押し合っていました。その子は修道女のマザー・ハバードのスカートの下に隠れようとしていました。私が膝をついたら、その子はやっと出てきてお花をくれました。

それから裏庭に出て、魚の干物場に行きました。イヌイットの人達は、魚の干物を犬に与えたり、自分達もよくたべます、また、修道女達は子供達に料理や縫物を教え、男の子達には、狩りや漁や魚のさばき方や乾燥の仕方を教えます。灰色の18世紀のスカートをまとい、前プリムのとんがったボンネットをかぶった修道女が、臭気のする小屋の戸を開けてから手をこすりながら、

「ワタクシタチ、ナレルノオ、タイヘンデスウ、コレエ」

と言っていました。

私はこの修道女達がとても好きになりました。彼女等は実によく自分たちを順応させてきましたし、子供達に対してもやさしく明るいのです。あのスイートピーをくれた子が一人の修道女が大好きで、彼女のスカートの下に隠れたり、抱き上げてもらうために自分の腕を上にも伸ばしたりしていました。「あの子は最初は私のボンネットを怖がりましたが、今では私のことが好きです」と言ってその修道女は笑いました。

バロウ岬まではかなりの悪天候でしたが、無線通信にとってはスリルのある日でした。アクラヴィックの無線通信技師達がとても思慮深く、助けてくれましたので、私はすごく嬉しく思いました。彼等と連絡を取り、それからハーシェル島、その後バロウ岬に連絡をつけました。バロウの無線が私を誘導してくれました。気象情報を先方からすぐに受け取り、バロウ岬では私達の位置がわかりました。バロウ岬にそろそろ着く頃には、暗くなりかけ、霞がかかっていた。私達の行く手の陸地は変わった影で細切れになっているのに気付きました。不揃いの塊に、薄明りがさしているのを見て、それがバロウで、家は何軒か固まってあるのかと思ってしまいましたが、もう一度よく見ると、それは大流水群だとわかったのです。見渡す限りゴツゴツした氷の固まりが重なり合い、それが荒涼と、気味悪く灰色にどこまでも果てしなく広がっているのが見えました。

1931年8月17-18日

ベトロバヴロフスクにて

愛するお母様

こんなに書くことを溜めなければ良かったと思っています。なぜなら、お母様にいろいろな出来事を順番にお伝えしたいからです。

でも、バロウ岬のことはどうしても書かないと。それはもう現実として、私達の心に強く訴えるものがありました。

私達は、夜中の一時ごろ霧の中を抜けて着きましたが、とても安堵しました。身体は、冷えきっていました。夜中でもまだ光が射していて、それは大流水群そのものから生じているように見える、冷たい灰色のこの世のものとは思えない光です。見渡す限りの大流水群の片側に不毛の土地が一角をなし、もう一方には、渦が霧に囲まれているので、私はそ

の小さな入植地（赤い屋根の教会、4、5軒の家、テント、そして潟の反対側に家が何軒かこじんまりとかたまっている）は、島かと思いました。

飛行が厳しいものだったのと、**パロウ岬**の実際の位置に一度着いたので、そこは私達にとって素晴らしいところに見えました。長い出洲の陸地、氷がそれに向かって盛り上がり、小さな潟が切り込んでいます。でも、4軒位の丸太小屋と、テントがいくつかのさびれた一群を見た時には、私の心は沈みました。それが**パロウ岬**だなんて……？ 無線通信所は？ 違う！ 無線マストがない。**パロウ岬**であるはずがない。

もっと大きくて新しい家がかたまっているところに、赤い屋根の家に2本の無線マストとアメリカの国旗がはためいているのが見つかるまで、出洲の内陸をたどりまわりました。私達は潟に着水し、何人かの人達が群がっている渚まで進めていきました。スライド式のキャビンの天井を開け、私は分厚いソックスを脱いで靴を履きました。刺すような寒さの11月の日のように、ひどく寒かったので、陸に上がる前に私の足はかじかんでしまいました。

そこにいる人々、全員パーカを着て、顔の周りに毛皮をつけ、アザラシの毛皮で作った靴をはいている人々を見て、私は突然、「ここの人達はみんなイヌイットだわ！」と思ったのです。ところが違いました。無線技師がカーキ色のマッキノーコートを着て出て来ました。私は彼のことを本当に有難く思いました。即座に彼に大声で叫んで、感謝せずにはいられませんでした。彼は、飛行中ずっと私達と連絡をとり続けてくれ、パロウでの天候がどうなのかを教えてくださいました。チャールズが、天候のことがわからなかったら、飛行を続けなかっただろうと、言っていました。

そして、私が送信出来なかった時、その時私達は無線を送るには低すぎるところを飛んでいたもので、無線を送信するほどアンテナを長く出し

ておけないけれど、受信するには十分な長さにアンテナを引っ込めていました。その時も彼は気象を知らせてくれ、情報もずっと送り続けてくれました。霧の中を飛んでいて、寒くて孤立している時に情報を受け取るのはとても心励まされます。彼は好感の持てる大柄な愉快な人でした。モーガンさんといいます。私はこの方がとても好きになりました。

私達が川岸に上ると、イヌイットの人達が退いて、大きな声が上がりました。正確には叫びというのではなく、歓迎のゆっくりした深い大きな声でした。それには何か荒涼たる土地と大流水群と似通うものがあり、私はひどく心を打たれました。

初老の男性が大きな外套を着て出て来ました。グライスト博士です。長老派教会の牧師で医師で教師で、その入植地の何でも引き受け人です。博士は私達を迎えてくれ、岸に上る時私に手を貸してくれました。そこで私は、4人の“島”の白人女性に会いましたが、全員毛皮のパーカを着ていました。グライスト博士の奥様はとても感じがよくてやさしい、自分のことを後回しするお母さんの様な方で、水浸して氷のような水溜まりのあるツンドラの上を、彼等の家まで連れて行って下さいました。そこは暖かく、ガス灯があって明るい家でした。台所のドアは明るいリビングルームに開かれ、さつまいもと焼たてのマッフィンの匂いがしました。私達のための気持ちのよい部屋のある2階まで連れて行って下さり、ランプとストーヴをつけ、石鹸やお湯やパウダー、歯ブラシ等々を私に説明して下さい、おまけに家の二階にお手洗いまであるんです！（勿論、配管はしてありませんが、あたかもしてあるかのように見えました。）

大きなテーブルが階下に出され、リビングルームはそのテーブルでいっぱいになってしまいました。窓辺のプランターには金蓮花が伸びていて、青い実が一つになっているトマトが育っていました。私は部屋に入る時にそれに気がついていましたが、グライスト夫人が、

「あのトマトは熟さないのよ、太陽が足りないから。でも葉っぱは大きくなって、匂いが嗅げるのよ。緑のお野菜が育つ匂いでさえ、私達にとっては嬉しいのよ」

とおっしゃっていました。

その後で、全入植者の家族がやって来ました。グライスト夫妻が、ホストとホステスです。それから、その息子さんと15歳のデイヴィッド、無線技師のモーガンさんとその奥様とかわいいお嬢さん（8歳か9歳）、政府派遣の教師のティンドルさんと奥様とかわいい坊ちゃん（12歳）、ベイリーさんという女性で正規看護婦の方、それから高齢のスコットランド人の貿易業者・ホプキンズさん。彼は30年間“外”へ出たことがなく、電話も自動車なども見たことがなく、イヌイットの女性と結婚してたくさん子供がいます。

私達は腰掛けて、最高に素晴らしいアメリカの感謝祭のディナーをいただきました。フルーツカップ、さつまいも、グリーンピースと蕪（以上缶詰）、トナカイの肉、鴨（野鴨を射止めて、肉の貯蔵室にいられたものです。1メートルほど地面を掘り下げると氷に当たるので、彼等は穴蔵を掘ってそこに物を貯蔵します）、缶詰のセロリーのサラダと果物とアイスクリーム（缶詰）でした。

グライスト博士の奥様が、村にはお茶もコーヒーも粉も無いと、教えて下さいました。大流氷群のせいで、一年に一度の船がまだ来ないので。彼等の食料供給はすべてなくなってきており、あちこち回ってそのディナーのために品物を集めてきてくれたのです。

モーガンさんの奥様が卵を2、3個（もちろん生鮮ではなく、圧縮された保存食）マヨネーズを作るために持ってこられました。他の人は、戸外では何にも育たないので、窓辺のプランターで育てたパセリを……。グライスト博士の奥様が土をノームから持って来たのです。

流氷は去年の冬の氷です。決して溶けることはありませんが、風向きがよいと、海岸から沖のほうに吹き払われて、船が入って来るのです。船には新任の看護婦、教師、そして彼等への供給食料に小包や去年からの手紙が乗っていました。

とにかく、彼等は3時半まで続くディナーを私たちに出示して下さいましたが、この頃にはチャールズがテーブルについたまま眠ってしまいました（少々わざとしたのだと、私はにらんでいます。）

翌朝、白髪頭でカルヴィンの肝っ玉と精神を備えた活発な男性である、グライスト博士が、正真正銘自分で建てた家を案内してくれました。“外”に住んでいる息子さんが一緒に設計しました。建築材料はすべて船で運んで来ましたが、イヌイットに手伝ってもらいながら、グライスト博士が自身で設計し、板を測り、寸法を合わせて、釘を打たなければならなかったのです。断熱と換気の設計がなされ、窓はすべて、二重の防風窓で、釘で完全に打ちつけられています。窓を開けることは出来ませんので、隙間が全然ありません。それで煙突のような換気装置がそれぞれの部屋につけてありますが、空気は入るけれど雪や雨は入らないようになっています。北極地方なので暖房が特別に設計されました。彼は水槽を造り、ストーヴから加熱して、配管をして、階下にお湯と水が出るようにしました。同時に、博士は毎週日曜日に説教を行い、水曜の夜には聖書の研究会を開き、医師の仕事と息子さんの勉強もみていました。グライスト夫人は正規の看護婦で、教師でもあります。

あのとてつもない生活の厳しさに対して、私の生活など何にも価値がないように感じました。そしてとても悲しい気持ちになりました。彼等はあそこに本当に長いこと暮らしてきたので、年老いて疲れてしまい、デイヴィッドを“外”の世界に出すことをとても恐れているのです。初めて彼等があの土地を踏んだ時には無線もなく、あの一年に一度の船だ

けて、彼等の息子の一人が亡くなった時にも、その知らせは4ヶ月後にやっと届いたのです。

彼等は私が歩くために“マクラク”というオットセイの毛皮で作った長靴を貸して下さいました。これを履かないと、いつも足が氷のように冷たく濡れるのです。イヌイットの人達が、その一年分の食料を射止めるために追いかけていた、トナカイの大きな群の後について、ツンドラの上を歩きました。頭に大きな重い角のはえた本物のトナカイです。トナカイは慎重で優美な足取りを苔の上に敏捷に進めているのですでした。「ハーイ！ ハーイ！」

とイヌイットは叫び、トナカイを集めるために追いかけるのです。毛皮の帽子をかぶった、輝くほつたと明るい細長い目をしたかわいいイヌイットの少年がです。このイヌイットはとても親しみやすい人達でした。会った人それぞれに暖かい家族のような親しみを感じました。

あざやかな緑のキャラコを着た老いたソルティは、走るときに、熊のように右に左に身体をくねらせます。彼女はいつも笑っていて、人の群れの中でも彼女が笑っているのがわかりました。私達は出かけて行って流水群の上を歩きましたが、彼女は私の先を歩いて道を踏みつけ、私が決して柔らかいところを踏まないようにしてくれました。

日曜日には教会に行きました。イヌイットの男性、女性、子供や赤ちゃんでぎっしりの小さな白い教会の前列に、チャールズと私が座りました。礼拝の間ずっと身体を動かす音や赤ん坊の泣き声が聞こえていましたが、彼等は熱心に説教を聴こうと、上体を前かがみに腰掛けていました。

グライスト博士がイヌイットに聖書の解説をしているのを聞くことはとても奇妙で、すごく不思議でした。

『私達は羊のように道に迷った。』という一節は、

ツンドラの上に散らばってしまったトナカイのように。

『神の力』は、

時々氷を爆破し、船を私達のところに来させてくれるダイナマイトのような力、神のダイナマイト。

『あなたの穀倉が満ちているように……』とは、

皆さんの貯蔵庫が、トナカイの肉でいっぱいになるように。

『あなたの牡牛達は強くなるでしょう。』は、

皆さんの犬ぞりの犬達が強く引っぱることでしょう。

それから、彼等は風変わりなむせぶような調子で、ゆっくりと抑揚をつけずに歌いました（とても快く甘く、ちょっと黒人霊歌のようです）。

♪私に神の栄光を、私にエイコウを♪

赤ちゃんがあまり泣くと（静かになるまで泣かせておきます）、必ず母親がしぶしぶ立ち上がって、おぶった赤ちゃんを自分の背中のもっと上にぐいと引き上げて、不器用に足音をたてて出て行きます。

グライスト博士がチャールズに「イヌイットの人達に話をして下さい」と言われ、夜の会合の時に話しました。チャールズはゆっくりと通訳を介して、犬ぞりと飛行機のスピードを比較して、飛行機が彼等に何をもたらすことが出来るかを話し、彼のためにイヌイットの人達がしてくれたことすべてに対する感謝の言葉を述べました。

私達はバロウに約3日間滞在しました。霧が晴れるのを待っていたのですが、ようやくある午後遅くにそこを発ちました。彼等と別れるのは、本当に嫌でした。私もこの一員だったような気がしていたのです。そして、本当に有難く思いました。最後のとっておきの上等のバターを私達のために出して下さったり、最後のコーヒーや粉を使ったりしてくれたのですもの。おまけに私は、足を暖かく濡らさないようにするために、誰かの“毛皮の長靴”を履いて来てしまいました。

モーガンさんは、3、400キロも無線機で私達を追跡して下さいました。私達は孤立させられている彼等が待っている船・ノースランド号の上を飛びました。その後、シュアード半島からキャンドルの局と交信しました。暗くなってきて、山には霧がかかっていた。すると、チャールズが突然私に大声で、

「僕達はシュアード半島の北側にいるけれど、前方の山に霧がかかっているから、今晩は着水して、ノームには明日の朝に行くからと、先方に伝えてね！」

と、言いました。

飛行機はその後降下していました。そして私はそのメッセージを非常に速く3回ほどたたいて送り、キャンドルから“R”を返してもらおうとしました（Rは了解という意味）が、雑音がひどく、それが出来ませんでした。私はアンテナを、急いでリールに巻いて引き入れなければなりません。私達は真っ暗な中に着水し、大きな渦の真ん中で止まりました。浜辺の暗い輪郭だけを見分けることができましたが、非常に驚いたのは、はるか向こうのほうに光が見えたのです。イヌイットのテントの火だと、私達は思いました。

チャールズが、どれくらい深いかを調べるために竿を入れてみました。たったの1メートルです！そこに停泊した方がいいと判断して、パラシュートを枕にして、前方のコンパートメントにある手荷物の上に（暖かい飛行服をきたまま）大の字になって眠りました。とても寂しく、遙か遠く離れたところにいるけれど、無事なのだと感じました。

明け方の3時頃、おかしいパッパッという音と声が聞こえました。

「もしもし！」

「チャールズ！あれは何かしら？」

私達は二人共、ものすごくびっくりして目をさしました。彼は飛び起

きて、天井を押し退けました。毛皮を満載した2隻の船がいて、1隻の方には小さな明りがついており、黒っぽい顔が見えました。

「やあ」

と、チャールズが言いました。

「ヤア。ワタシタチ……カモ……トル。」

「ああ、それはいいですね」

と、会話を交わしました。どこだかもわからない地の果てでの真夜中のこと、これにはかなり驚きました。

「アナタ……ココ、チャクリク？」

「ええ、夜を過ごすために着水しました。私達のような人をたくさん見かけますか？」

と、チャールズが尋ねました。

「ハイ……ハイ」

と、その男性があいまいに答えました。全然通じていなかったのです。

「鴨はたくさん獲れますか？」

（シュアード半島の沖で明け方3時半に、いったいどんな話題で会話を交わせばよかったのでしょうか？）

「ハイ——カモ、トル」

「じゃ、私はまた寝るとしますか」

それで彼等は何事もなく行っていました。翌朝になって、私達がシスマレフの入り江に一泊したことがわかりました。

ノームまで道中ずっと、無線交信は良好でした。ノームに来る途中、初めて山々を越えました。ベーリング海はその山のかたにくっきりと青く光っていて、大地は緑でした（バロウから、遙か南に飛んでいたのです）。私達は渦のような港に着水しました。セイフティ港です。ノー

ムから約50キロの所にあります。そこで、私達は車に乗り換え、ノームまで運転して行きました。とても親切な方達が、私達を出迎えて下さいました。グラント・ジャクソン夫妻です。

道路沿いには、たくさんの花が咲いていました。^{やなぎらん}柳蘭、^{かぶとぎく}兜菊、^{のこぎりそう}鋸草、濃い紫色のアヤメ。でもここでは、窓辺のプランターでしか野菜は育ちません。ノームはベーリング海沿岸にあり、灰色の板張りの傾いた家並があるような小さな町です。なんだか、ボール紙で作った映画のセットが、今にも倒れそうになっているのに似ています。家は一度もペンキを塗った様子がなく、ただ雨風にさらされた海のような灰色なのです。その多くは、もう人が住んでいませんし、ゴールドラッシュも終わり、板で囲いがされています。

それでもこの町には、にぎやかで陽気な気配があります。数軒の店が有り、モカシン、象牙、薬、食料等を売っています。大きなガラスのショーウィンドウには金蓮花がいっぱい飾られて、金蓮花の壁のようです！私は、ペーパーフラワーなのかと思いましたが、ウィンドウの中にあるプランターからちゃんと蔓が伸びていました。

ジャクソンさんご夫妻は、私達をブリキの貯金箱のような建物の中にあるアパートメントに迎えて下さり、親身な世話をして下さいました。ホーローのバスタブ（！）で、蛇口からお湯の流れる熱いお風呂に入れていただいたり、新鮮な牛乳（夏の間だけ、地元の乳牛がお乳を出すので）をいただいたり……。ジャクソンさんの奥様は、以前ラジオで歌っていたことがあり、またダンスも教えていらっしゃいました。彼女はとても悲しそうに、

「ノームでは、誰も音楽やダンスに興味がないの」

と、おっしゃっていました。

夏の間キング島から、イヌイットの人達がノームに大きなオットセイ

〔ノームは金鉱の街として、その昔栄えていた。〕

の皮で造ったボートに乗ってやって来ます。彼等はそのボートをひっくり返して、それでテントを作るのです。小さなアザラシの皮で出来たカヤックも持っていますが、それは漕ぎ手が座る位置に穴が開いているだけで、全体が皮で覆われています。

イヌイットの人達は、私達のためにカヤック・レースを開いてくれました。キング島の酋長が優勝しました。彼はその種族の中で他の誰よりも背が高く、カッコ良くて、おまけに強いし、踊りも狩りもうまいのです。彼がそうでなくなると、酋長からは引退です。酋長は水の中でカヤックに乗ったまま、横向きの宙返りも出来ます。私は彼等が見せてくれた踊りについて、酋長の弟さんと話しました。踊りの時彼等は、鷺の羽で出来たふちなし帽をかぶりましたが、時には狼の頭をかぶることもあり、それから腕には円板状の飾りのついた小手をつけます。彼等の動きはしなやかで敏捷で、動物のようです。酋長の弟さんはとても嬉しそうに、そして重々しく、

「ワタシ^{my}ノ！」

と言いました。私達は

「私の？ ……どういう意味ですか？」

と聞き返しました。

「ワタシノ！」

彼はきっぱりと、

「ワタシ ノ アニ……ワタシ ノームスコ……、ワタシ ノ オイ——ワタシ^{my}ノデース！」

ノームからロシアのカラギン島までの飛行は、長くかかりました。最初は霧の上を、それからシベリアの沿岸沿いを南下し、ギザギザした山々（氷河を抱いた火山のようです）の上を一日中、飛びました。でも、私は

セントポール島と30分ごとに交信を続け、時々ロシアの局とも、また汽船のプレジデント・クリーヴランド号とも交信していたので、景色を楽しむ余裕はありませんでした。チャールズが

「ほら、着いたよ！」

と大声で言ったので、私はアンテナを引き込んで漸く外を見ました。

カラギン島は、低木に覆われた濃緑の風景で、遠く鋸の歯のような山々が望めました。どっしりした造りの4軒の木造の家にはとんがった煙突があり、場違いに見えました。

25人程の人垣が浜辺に見えました。その何人かはロシア人のイメージそのものです。青いスモックに膝までのズボンをはき、髭のはえた顔、帽子、長いブーツといういでたちです。また、先住のイヌイット（ただし、彼等はそう呼ばれてはいません）の女性が二人、ダブダブのブラウスを着て短いスカートをはいていました。茶色の子熊が犬のように、彼等の後を追ってきます。若いボブ・ヘアの美女が大きな平底の船に乗り、私達をフランス語で迎えてくれました。

「私はフランス語はわかりますが、話すのは少し苦手です」

と、私が言い終わらないうちに、彼女が陽気に、

「ああ、私は英語アナシマース」

と言いました。でも、彼女の英語を理解するのはちょっと大変でした。

例えば、

「(あの子熊の) 母熊は殺された」

と彼女が話すと、「キルド」とはどうしても聞こえず、「^{チャイルド}子供」のように「カイルド」と響くのです。それから

「彼はとても荒々しく育つでしょう」

と言う時の、「^{ワイルド}ワイルド」もぜんぜん発音が違うのです（「キルド」のように「ウィルド」と聞こえます）。これじゃあ、わからないでしょう？

英語が喋れる人は彼女だけでした。ボブ・ヘアの美女は、私達を背の高い金髪のご主人に紹介してくれました。それから、ぶっきらぼうでひどく吃る髭をはやした男性と、艶のある髪の毛を後ろで結んだ、おとなしくてニコニコしている彼の奥様にも紹介されました。

髭の男性は、毛皮で覆われた扉から私達を招き入れ、束ねた毛皮を壁にいっぱいかけてある廊下を通り、大きな石造りのオープンがある台所を横切って、小さな部屋に通してくれました。その部屋で何度もお辞儀をしたり、身振り手振りで話したり、お互いに照れ笑いをしてから腰掛けました。

その後で、つやつやした髪の毛の奥様が、果物と地元の乳牛からしぼった新鮮な牛乳、それから肉とパンを私達に出して下さいました。新鮮なおいしい食べ物ばかりです。私達は、ノームでいっぱいにしてきた自分達のランチ用バスケットを取り出して、肉を挟んだサンドウィッチとバタークッキーとミルクチョコレートと、皆に回しました。気に入ってくれたようです。彼等はお互いにお喋りをして、それをボブ・ヘアのフランス人が通訳しようとしていました。

すると突然、二人の男性が大笑いしたのです。彼女は笑って、私達がノームを発ったのは何曜日だったか聞きました（もちろん、その日の朝でした）。

「金曜日ですって！」

「そう、そう！」

と言って、彼等はまた笑いました。

「今日は土曜日ですよ！」

私達は日付変更線を越えたので、一日損をしてしまいました。

子熊が、食べ物の匂いを嗅ぎつけて、台所の中まで入ってきて、テーブルのすぐ傍で後ろ足で立ち上がりました。誰かが大きな声で叫びました。

「ああ、ダーニャだ。ダーニャ、ダーニャ。」

子熊の爪が長い上に、少し手に余り始めていたので、彼等はなかなか子熊を押し退けることは出来ませんでした。そこへ男の子が肉を一切れ持って急いで入って来て、ダーニャの鼻の前に持っていき、すぐに肉を引っ込めると、子熊は不器用に体を左右に揺さぶりながら男の子について、部屋の外へ出て行きました。でも、それ以上はもらえないとわかった、子熊は怒って「ウーッ」と、うなっていました。

私達はその部屋に寝ました。白テンのふさが、壁のフックに高く吊されていて、お気に入りの猫の写真、それから、松の森にいるノーム達の刺繍が一枚飾ってありました。この部屋の家具は、お皿と食べ物を収納する食器棚、ダイニング・テーブルに幅の狭いベンチがありました。夫婦は、私達のために、板にキャンヴァスを渡した簡易ベッドを持って来てくれました。そして、私達は荷物の中から毛布を取り出しました。



翌朝、ボブ・ヘアの美女が

「私は動物学者で、夏の間島の動物達の研究をしているの」と、教えてくれました。家族はモスクワに住んでいて、小さな男の子がいるのだそうです。

「私にも息子がいるわ」

と言うと、二人の女性はとても興味を持ち、

「幾つになるの？ どこにいるの？」

と尋ねました。それから、しばらくボブ・ヘアの美女と艶のある髪のお嬢様がロシア語で話し合った後、思いきったように

「写真、持っていますか？」

と聞かれました。私が写真を取り出すと、二人はとても喜んで楽しそうに見ていました。「ああ、……ふうーん」

と言って、テーブルの上に写真を全部広げて一列に並べ、両手の指で大きな丸を作り、チャーリーの目が大きいと話していました。それから、彼等が一番好きな写真を指差しましたが、それはチャールズにそっくりに写っているあの子の写真でした。

チャールズ・ジュニア
1931年ノースヘイヴンにて

